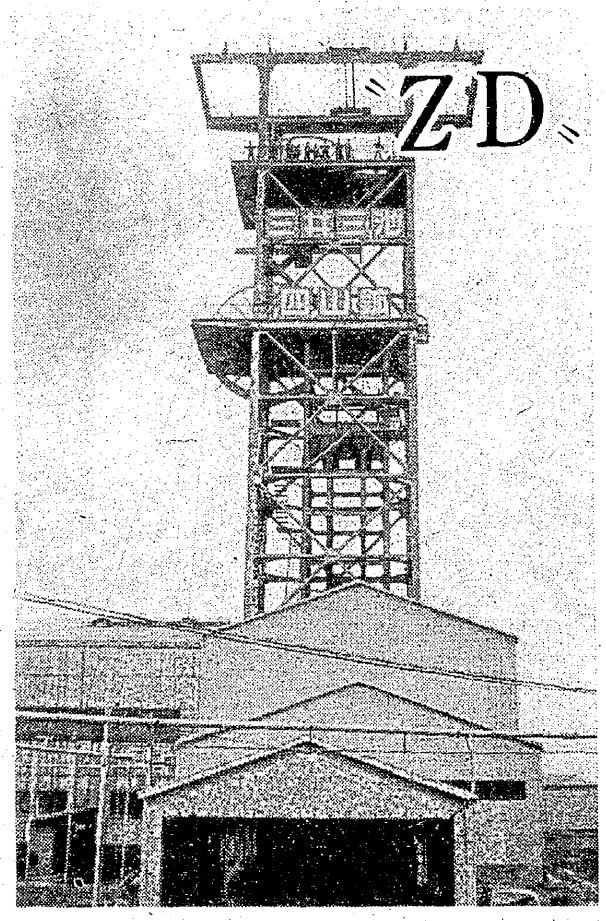
四山に微傷ウヨウヨ

坑内労働者　十人に七人が重軽傷

負傷統計が告発

＝ZD＝の意味は？

三井三池の会社側が発表している在籍労働者の負傷統計によれば、坑内労働者の十人に七人が重軽傷（会社が微傷としているものも入れて）を負い、さらに気狂いのように〝ZD運動〟を進めている四山鉱では、官庁への届出を必要としない〝微傷者〟（休業二日以内）が、何と届出を要する〝重軽傷者〟（休業三日以上）の二倍にも達している、おどろくべき事実を自から告発した。まさに〝ZD運動〟こそ、労働者の命を守る保安確保の闘いにとっていかに大敵であるかを、労働者の目の前に突きつけた。



写真は、高だかとそびえる四山鉱の堅坑やぐら

依然として危い坑内労働

まず三井三池の在籍労働者中、特に坑内労働者の十人に七人が負傷を負っていると前述したが、それの具体的な事実を〝会社統計〟（昭和四十七年度）から見ると、次の通りである。

同年十二月末の在籍労働者数　五、八〇七人
負傷総件数　二、八二五件
対在籍労働者比　四八・六五％
軽傷以上者数　一、一八〇人
対在籍労働者比　二〇・三二％
微傷件数　一、六四五人
全負傷対在籍者比五八・二三％

なお同年の坑内労働者の負傷だけについて見ると、次のような恐るべき事実となる。

坑内在籍労働者数四、〇九〇人
坑内負傷総件数　二、七五八件
対在籍労働者比　六七・四三％
軽傷以上者数　一、一五八人
対在籍労働者比　二八・三一％

その前年の場合も、全在籍者に対する負傷比四八・七一％にかかわらず、坑内の場合のそれは、六六・三八％。いずれにせよ、いかに坑内労働者で負傷する人が多いかがハッキリしている。

微傷で統計ごまかす四山鉱

三井三池における労働者の負傷実態を鉱別に見ると、次の通りである。（昭和四十七年度の実績）

宮浦鉱の場合
死亡　三人
重軽傷件数　二六三人
微傷件数　四一六人

三川鉱の場合
死亡　一人
重軽傷件数　五八一人
微傷件数　五七八人

四山鉱の場合
死亡　一人
重軽傷件数　三二〇人
微傷件数　六三〇人

なお参考までに坑外における負傷状況を見ると、宮浦鉱（重軽傷三人、微傷六人）、三川鉱（重軽傷五人、微傷一三人）、四山鉱（重軽傷一人、微傷八人）となっている。

誰がいい初めたものか、いま三井三池には〝保安部預り〟という言葉が広がっている。本来ならば三日以上〝休業〟を要する重軽傷者を、官庁への届出をごまかすために、「とにかく、保安部まで来てくれ。出勤だけでもしてくれれば、賃金は払ってやるし、仕事はしなくてもよい」という言葉で勧誘し、〝微傷〟にして統計からかくしながら保安部でブラブラさせていることをいうが、それにしても、他鉱に比べて四山鉱の〝微傷者〟の何と多いことか。

「新労組員の中には、頭を負傷して八針ほども縫っていながら、出勤している人がいるちいうが」――とのうわささえ職場には流れているが、四山鉱の右の事実一つとらえても、〝ZD運動〟こそ働く者として絶対に許すことのできない大敵だというべきである。

果てしなき合理化推進

一歩一歩なし崩しに

宮浦鉱の一部　三川鉱の13卸へ

このほど会社側から、宮浦鉱の一部の坑内労働者を、終掘のためきたる八月から三川鉱の十三卸部内の六片に開削する新しい払に移すなど、一般にきわめて広く影響を広げずにはすまない合理化計画を提案してきた。

同卸は三百五十メートル坑道に連なるところで、坑口からほぼ千メートルばかり入ったところ。

現在同部内には、三川鉱の上・下段スライシング払が稼動しているが、同部内にいま一払設定し、本来ならば三川鉱が当然受けもつべき払いであるところに、会社は宮浦鉱からの移動によって稼動する計画。この方は自走枠払。

そのため、両鉱の管理区分が混り合うことになり、勢い三川鉱側の払採炭工など他の職種にハネだされたりすることが当然視されており、「合理化合理化で、会社はもうかるばかり。しわよせは俺たち労働者。いつまでも、こんなやり方が許されていてたまるか」と職場にはふんまんの声がようやく広がりはじめている。

しかもすでに、会社は宮浦鉱から掘進工などを入れて払開削に当たらせており、八月には移動を完了したいたくらみ。

掘進に当っている人びとの作業実態は、仕事仕事に追いまくられて中食もろくに食いださず、人手不足を早出・残業でまかなっているとか。この合理化は、保安上からも重大問題を提起している。

× ×

三井の市民税数千円

働く者には追徴税の追い打ち

一月十五日、給料袋に入っていた〝四十七年分給与所得の源泉徴收票〟を見て、職場で驚きの声が上がった。

年間僅か七十万円～八十万円前後の所得の人に対し、一万円～一万二、三千円の税金がかかり、不足分として、五千円～八千円が追徴される人が何人かあった。

皆五十才前後の人で、ようやく苦しい闘病生活の中で子供たちを高校にまで入れ、無事卒業させ、奥さんたちもその間習い覚えた内職がとうとう本職となり、年老いた体で、CO患者の夫の負担を少しでも軽くするため、弁当持って朝早くから晩おそくまで働き、ようやく子供たちを巣立たせて、ひと息入れようとする時、無情にも税金の追い打ちをかけてきたのだ。

庶民宰相といわれて華かに組閣した田中内閣も、何のことはないやっぱり自民党の政策を忠実に実行するばかり。というよりも、独占資本擁護の姿勢を、いままで以上に強めている。

一日一日と値上がりしていく物価。極端にも、倍の値にハネ上がったのは豆腐や揚げばかりではなく、材木や土地など、悪質業者が国民の手のとどかない高値で買いしめをはじめている。

このままいくと、日本国じゅうひと騒動は必至だ。

春闘で大幅賃上げを獲得するのは当然だが、このような田中内閣を打倒し、政治を働く者の手に握らなければ、もう一度戦争にさえまき込まれかねないのだ。

目前に、国鉄、医療費、食料品と、つぎつぎに値上げが待ち構えている。

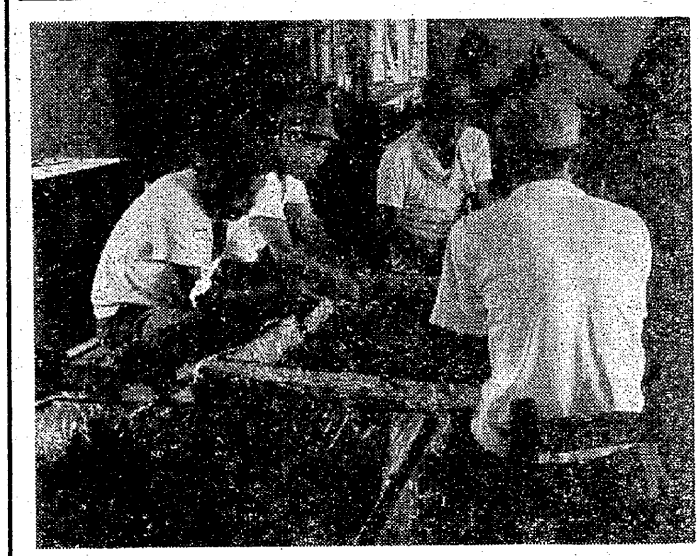
大独占資本の三井は、たとえ何億円もうけようが、払っている市民税はわずかに数千円。あいた口がふさがらない。

年末調整という名の追徴税と、三井の市民税。それに物価の値上がり。

働く者が、何とか早く手を打とう。

×

三川指導部十一分会新聞〝いのち〟（二月一日発行から）



新港町作業所で軽作業

姿見

今年も春闘について あちこちの会合の中で語られていますが、今年こそはほんとうに頑張らなければ……と思っています。

過ぎた日の事を今更言っても仕方ないとは思いますが、頭の中にこびりついてがまんできずペンをとりました。

去年の十二月十日の事です。私達には、待ちに待ったボーナスの日でした。十二万三千円の袋を前に、父ちゃんも、私も、これで月々の赤字のやりくりも何とかできると思いながら、くつろいでいた所に、長男が帰ってきました。

「今日は、父ちゃんのボーナスの出たっじゃろ。坑内で、二十七年間も働いておるとじゃけん、僕よりも多かろうネ」、と何の悪る気もなく言ったら、父ちゃんは急いで、ボーナス袋をコタツの天ばんの下にかくしました。私は「ハッ」としましたが、誰を責めることもできません。

高校を卒業して、四年にしかならない息子よりも少ないボーナスでは、たとえ低賃金が三井の政策のためだと解っていても父ちゃんは親父として、きっと情けなかったのでしょう。

父ちゃんのこの時の気持は、理屈ではいい現わせない悔しさとさびしさで、たまらなかったのです。

長男もそれとなく気付いて、炊事場に立った私に、「悪い事を言ってしまった。父ちゃんにすまない」、と言って後悔しましたが、誰も悪いのではありません。悪いのは三井です。会社の低賃金政策なのです。まじめでやさしい父ちゃんを苦しめる三井や会社に、心の底から怒りがこみ上げます。

日増しに物価の上がる今日このごろでは、私達一人ひとりのやりくりではどうにもできません。台所をあずかる主婦の力を結集し、父ちゃん達の職場での闘いと力をあわせて、大幅賃上げを闘いとり、給料日も、そしてボーナスの日も、家族そろってたのしく迎えられるよう頑張らなければ、と思います。みんなで頑張りましょう。

×

今号は〝姿見〟欄を三ページに紹介することになりました。

本当に悲しかったボーナス日のこと

本所支部　S子